＝運命＝

無音Ψ無心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
＝運命＝

【Ｎコード】
Ｎ９２６２Ｉ

【作者名】
無音Ψ無心

【あらすじ】
死を宣告された少年。
彼が、幼馴染みと過ごす最期のとき。

（前書き）

テスト期間の中、書き下ろした物です。

誤字脱字がひどいかもしれません。

では、どうぞ。

0

「あなたは明日死にます」
黒いローブに身を包んだ占い師の女性は、淡々と僕に向かって告げる。
「これは……運命です。始めから決まっている物、抗うことは出来ません。あなたは確実に……明日死にます。それまでの人生をどう過ごすかは、あなたの自由ですから。悔いを残さないように生き抜いてください」
それでは、あなたの人生が良いものとなりますように。
そう言って、彼女は何処かに去っていった。
……。
おいおい。
僕が明日死ぬ、だと。
そんなこと、信じられるはずがなかったし、信じたくもなかった。

1

何かやり残したことは無いだろうか。
いざとなって考えてみると、意外とこれが浮かんでこない。
僕の命も……今日限りだというのに。
もっとも、それは昨日の裏無し氏の言葉が本当だった場合の話だけど。
でも……やり残したことは多分、何も無い。
あるとしたら、それは多分、生きること――あいつの傍にいるこ

と。僕には、もう出来ないこと。だから……僕は一秒でも長くあいつの傍にいたい。あいつの傍で一生を終えられるなら、思い残すことなんて何も無い。

そんなことを考えながら、僕はあいつの家のチャイムを鳴らした。

家の中から足音が聞こえてくる……それが止んだのと同時にドアが勢いよく開かれた。

「おはよう、雪乃」

僕は笑顔を作って言った。

「うん。おはよ、曖人くん」

透き通るような長い黒髪、か弱く開かれた瞳。穢れの無い、澄み切った――

純粋な笑顔。

思わず見惚れてしまいそうな、魅力的な笑顔。

朝倉雪乃（あさくらゆきの）。

僕の幼馴染である。

ちなみに、曖人というのは僕の名前。葉崎曖人（はざきあいと）。

「それで、どうしたの？　まだ、学校に行くには早いと思うよ」

雪乃にそう訊かれてから、僕は一呼吸置いて言った。

「……なあ、雪乃。何も訊かずに、一日僕に付き合ってくれないか？」

「えっ……うん、分かった。今日だけだよ」

雪乃が簡単に承諾してくれたことに驚きもしたが、その反面で、安心した。

断られていたりしたら、それで終わりだ。

「理由は……訊いちゃだめなんだよね？」

雪乃が控えめに訊いてくる。

……正直、僕にはお前に話す勇気が無い。話さないでおきたい。

だから。

「明日……明日には、必ず話すから」

僕が今日死ななかったら、話すから。

思わずそう言いそうになって、慌ててその言葉を飲み込んだ
危なかった……。
「じゃあ、行こうか」
僕は、雪乃に手を差し伸べて言う。
「うん！」
雪乃は笑顔で頷いた。
僕は、その笑顔に救われた気がする。残り僅かしかないのかもしれない人生でも、前向きに生きれるような気がする。
これなら……僕の人生、そんなに捨てたものでもないな。
「――ありがとう」
僕は、雪乃に聞こえないように小さく呟いた。

2

「さてと、何処に行こうか」
情けない話。一日付き合ってくれといったものの、特にこれといった目的があるわけでもない。
それに。
「学校をサボっているから、何処へでも行けるってわけじゃないしな……どうしようか」
むやみにいろいろな場所へ行くと、補導されかねない。僕はそれでも別にいいのだけれど、雪乃の経歴に傷がつくのは忍びないので、それは避けたい。
しかし、そうなるといける場所は限られてくるんだよな。
「ねえ、曖人くん。とりあえず公園にでも行かない？　この時間なら、多分誰もいないだろうし」

公園か……。
「そうだな。そこで、これからどうするかを考えればいいな」
それから、むごんのままで公園まで歩く。
『一縷公園』
読みは、『いちるこうえん』という。わずかな、見たいな意味の単語らしい。
一体、これを付けた人は何を考えていたのだろうか。普通読めないだろ、こんな漢字。
それに、そんなに小さい公園というわけでもない。
遊具は中央にある噴水のみ）噴水を遊具と言ってしまって良いかは甚だぎもんだが）。
しかし、その代わりに公園の周りには、青々としげった木々が植えられており、自然に触れられる場所となっている。
遊具がほとんど無いせいで、実際よりも大きく感じてしまうというのもあるだろうが、それを差し引いても、小さいというよりは、むしろ大きい方であるだろう。
まあ、昔がどうだったかは知らないが。
閑話休題。
「その辺のベンチに座るか」
噴水を　取り囲むように設置されているベンチに座ろうとして……気付く。
「何だ？　これ」
何か、真っ黒でもじゃもじゃとした得体の知れない物体がベンチの上に置いてあった。
とりあえず、座るのに邪魔なので退かそうと思い、それに手を伸ばす。
それに手が届く瞬間、鋭い痛みが僕を襲った。痛みの元は……黒い物体に伸ばした右手。手の甲に赤い線が三つ並んでいる。
もう言うまでもない。
その黒い物体は――猫だった。全身真っ黒の猫。瞳だけが黄色く

光っている。
「大丈夫？　曖人くん」
雪乃が心配そうに訊いてくる。
心配をかけたくなかったので「大丈夫」と答えておく。
正直、かなり痛いけど……。それでも、我慢できないほどの痛みではない。
……よし、もう大丈夫。
ん？
「あれ？　さっきの猫は？」
僕が訊くと、雪乃は首を横に振った。
どこかへ行ってしまったのだろう。見事なヒットアンドアウェイだな。自分の手を引っかいた猫にこんなことは言いたくないが。
「ねえ、曖人くん。今から、ここの掃除しない？」
引っ掻かれた時に怯まず反撃していれば、と僕が悔やんでいると、唐突に、雪乃が脈絡の無いことを言い出した。
まあ、それを断る理由は無いのだけれど。
「別にいいよ」
「じゃあ、ちょっと待っててね。箒とか持ってくるから」
そう言って、雪のは家の方向へ走っていった。
ぼくは、その場に立ち尽くす。
……さっきの猫を探し出して、復讐するか。
そんなことを考えもしたが、どうせ返り討ちにあうだけなので早々に断念した。
……暇だな。
無言で、雪乃の帰りを待つ。
実際には、そんなに長い時間がたったわけではなかったが、僕には気が遠くなるほどに長く感じられた。
「お待たせ！」
「お帰り……」
僕の様子を見て、雪乃は「どうしたの？　元気ないよ」と訊いて

くる。
「いや、大丈夫だよ」
「じゃあ、掃除しよっか！」
雪乃から、竹製の庭箒を受け取る。それから、軽くその辺を掃いてみて……驚いた。
予想以上にごみが多かったのである。
普段は気付かないだけで……公園っていがいとよごれているんだな。定期的に誰かが掃除していると思っていたんだが。
よし。
最期くらい、社会に貢献するのも悪くないか。
――そう思った。

4

「そろそろ……お昼にしようか」
雪乃がそう言ったのを聞いて、僕はふと手を止める。
もうそんな時間か……。
いつの間にか、太陽の光が真上から差していた。時間がたつのを忘れてしまうくらいに、掃除に一生懸命だったということか。
「そうだな」
僕らは集めたごみを処分して、公園を後にした。
……。
特に話すことも無く、車の通り過ぎる音だけがその場に響く。
――そんな時だった。
「あっ！」
突然、雪乃が車道を見て、何かに驚いたかのような大声を上げた。
僕も車道を見て、今起こっている事態の全体像を把握する。
小さな子供が、転がっていったボールを追いかけて車道に出てしまった。そして、その子供に迫る車。

僕がそこまで把握した――その時だった。
雪乃が車道に飛び出した。
雪乃が、子供をかばうように車の前に出る。……考えるよりも先に体が動いた。
僕は、地面を蹴って車道に出る。
そして、雪乃たちを突き飛ばした。
ごめん、ちょっと痛いかもしれないけど。
死ぬよりは……よっぽどいいから。
今日、僕は死ぬ。
……ああ、これが僕の運命だったか。
雪乃のために死ねるのなら、それだけでいいな。
目の前に迫る車……そして、僕の体は宙を舞った。

「じゃあな。――ありがとう」

今度は聞こえるように言った。

5

緊急の手術が終わり、曖人くんはなんとか一命を取り留めた。でも、まだ目を覚まさない。
もしかしたら、これからもずっと。
「何で。何で、こんな」
その時。
がらっ、と。
私の言葉を遮るように、突然、病室の扉が開いた。
そこに立っていたのは、曖人くんが今日死んでしまうという未来を私に教えた、黒いローブに身を包んだ占い師さん。
「やっぱり、駄目……」

彼女は、下を向く。
「占い師さん。あなた言いましたよね。私なら、未来を変えられるって」
「私も変えて欲しかった。でも、未来は簡単には変わらないのよ」
じゃあ、曖人くんは……。
「多分、目を覚まさないわ。このままずっと」
「そんな……」
私をかばったから。私のせいで。
「あなたのせいじゃない。これは運命だったのよ」
運命……いや、違う。
そんな言葉で……諦めて良いわけが無い。
「私は諦めません。曖人くんが、目を覚ますその時まで、私は信じて待ち続けます。あなたが運命を信じるのなら、私は曖人くんを信じます」
「私たちが信じるなら——運命は変わるんです」
彼女は、彼を待ち続ける。
そして……運命は。

『destiny』is fin

（後書き）

どうでしたか？
楽しんで頂けたのなら幸いです。
感想、評価などもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9262i/

＝運命＝

2010年10月14日20時18分発行